
黒の皇太子・改

九条双月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の皇太子・改

【Nコード】

N8602H

【作者名】

九条双月

【あらすじ】

ペンジュラム王国のアレグザンダー王子は美青年にして剣の達人しかしズボラで遊び好きな性格のため、王宮中の人々の頭痛の種となっていた。父王殺しの濡れ衣を着せられて国を追われた彼は、父を手にかけた犯人を見つけ出すことを誓うのだが・・・！？シリアスになりきれないドタバタ冒険ファンタジーです。

第1章 出奔(1)

その老人は、よく戦った。

ペンジュラム王国の国境に近い森の中でペクトラルドラゴンの大群に遭遇したのだ。ふだんなら人里近いこのような場所で決して見かけるはずのない獰猛な怪物に出くわしても、老人はまったく慌てることなく、雷光呪文の連発でドラゴンの大半を倒した。高齢とは思えぬほどの呪文の威力であった。

しかし、なにぶん敵の数が多すぎた。老人の魔力はまもなく尽きた。獲物が抵抗の手段を失ったことを感知したらしいペクトラルドラゴンが、赤い瞳を邪悪に光らせながら、ゆっくり老人を取り囲む。老人は一本の大木の幹に背をつけてドラゴンと対峙した。老人は剣を帯びていない。武器になりそうなものといえば杖だけだ。

その杖を振りかざしながら、初めて老人の顔に絶望の色がよぎった。

そのとき。

「いやあ、すまんすまん、爺。待たせたな」

緊迫感のまったくなく、若々しい声。と同時に、そばの茂みをかき分けて、ひとりの長身の青年が姿を現した。

黄金そのものよりもまばゆく輝く金髪、どことなく高貴さを感じさせる端正な顔立ち、そして灰色の外套の下からのぞく、金糸でペンジュラム王家の家紋が刺繍された純白の着衣。青年のすべてが、まるで太陽が具現化したかのような輝きを放っていた。歩み寄ってくる動作にも若さと躍動感があふれている。絵に描いたような美しく凛々しい若騎士であった。

青年は魔物どもをねめ回し、ちらりと不敵な笑みを見せた。陽に焼けたたくましい顔の中で、真っ白な歯がきらめいた。

「ドラゴンども。わたしが腕によりをかけて調合した秘伝の薬の威力を、その身をもって確かめるがいい。食らえ、『矯小化』！」

叫ぶと同時に、懐からつかみ出した虹色の小球を、ドラゴンの足の地面に叩きつける。小球が砕けて妖しい紫色の煙が猛然と立ちのぼり、魔物どもを完全に包み込んでしまった。

『矯小化』は、中級以上の薬師が調合できる代表的な攻撃補助薬の一種だ。この薬を浴びた者は体躯の大きさも力ももとの七分の一下になる。

天へ向かってたちのぼる煙の中で、細長い影が動いた。それはドラゴンの首であった。首は見る見るうちに長く、太くなり、煙と共に天へ立ちのぼっていく。煙の中から太いドラゴンの胴体が見出してきた。魔物が足踏みすると、すさまじい地響きが辺りを揺るがせた。要するにペクトラルドラゴンはおそろしい勢いで巨大化しつつあった。

はるかな上空から、ドラゴンの赤い瞳が地上の青年と老人を見下ろした。その口が裂け、鼓膜をつんざく鋭い叫び声がほとばしった。

青年は、人の背丈の七倍以上にまで巨大化した怪物を見上げ、首をかしげた。

「あ・れーっ？ おかしいなあ。小さく縮むはずだったんだけどな？」

「ぎゃー！！ 助けてくだされ、殿下ー！！」

老人の悲鳴が響いた。ドラゴンが足踏みした拍子になぎ倒された木の下敷きになってしまっている。事態はあきらかに、青年が登場する前より悪化していた。巨大化したドラゴンはいまや少し身動きするだけで、かるがると人間を踏みつぶすことができるのだ。

青年は舌打ちした。仕方ないな、とでも言いたげだった。

すらりと鞘から剣を抜き放つ。人間離れた跳躍力でジャンプし、一匹のドラゴンの背に飛び乗って、深々と剣を突き立てた。ドラゴンの堅い鱗に覆われた皮膚を貫いたのだから、青年の怪力ぶりはただものではない。傷口から大量の血液がほとばしり出た。剣は狙いあやまずドラゴンの心臓を貫いたのだ。

青年はやすやすと剣を引き抜き、倒れかかるドラゴンの体からひ

らりと飛び下りた。

「剣技・・・『裂帛斬』！」

地に降り立つと同時に、目にもとまらぬ素早さで剣を水平にふるう。少し離れた地点にいるものも含めて、三匹のドラゴンの首がばつくりと切り裂かれた。

返す刀で、青年は残る一匹のドラゴンの首も切り落とした。

魔物どもの生命を失った体が倒れた後、あたりに突然おそろしい静けさが訪れた。大量に地面に染み込むペクトラルドラゴンの血液で、辺りになまぐさい臭いが漂い始めている。青年が巨大ドラゴンを全滅させるまで、ほんの三十秒とたつていなかった。

青年は木の下から老人を助け出した。

老人　ペンジュラム王家に古くから仕える家老にして魔道士、バルガス「シユピーゲルは、うらみがましい目つきで青年を見上げた。

「なぜ初めから剣をお使いになりませんでした、殿下？　おかげで死ぬ思いをいたしましたぞ」

青年は肩をすくめた。

「だって嫌なんだよ、剣を振り回して暴れるのって。おまえには判んないだろうけど、大変なんだぞ、あの『裂帛斬』ってやつは。脳が疲れるんだよ・・・まるで年始の公式式典のセリフを丸暗記させられる時みたいだ。薬を使ってちよいちよいつと敵をやっつけちゃった方が、カツコいいし、ずっと楽だろう？」

「あいにくですが、殿下には薬師としての才能はまったくない、と申し上げても過言ではありませんまい。もう、わけの判らない薬に頼るのはおやめ下さい。はた迷惑です。殿下の剣の腕は王国随一ですが、なぜ変てこりんな薬を持ち出す必要がありますでしょうか？」

殿下のあやしげな薬のおかげで、これまで幾度も・・・」

「し、失礼な奴だなあ。『わけの判らない』だの『変てこりん』だの『あやしげ』だのって・・・こう見えても初めよりはだいぶ上達してきたんだぞ？」

魔道士バルガスは溜め息をついた。

この青年の名はアレグザンダー・ファルシオン・クレメント・オクス六世。『水の大陸』西部を支配する大国・ペンジユラム王国の第一王子にして、王位継承者だ。堂々たる立派な体躯に典雅な容姿、誰もが認める剣の冴え、とくればどこに出しても恥ずかしくない素晴らしい王子であるはずなのに、良く言えば鷹揚、悪く言えばいいかげんでズボラで遊び好きな性格のため、王宮のすべての人々の頭痛の種となっていた。

第1章 出奔(2)

今をさかのばること半年前。同盟関係にある隣国、トリーエン王国からペンジユラム王国に対して援軍の依頼があったのだ。国籍不明の謎の軍隊の侵略を受けているという。依頼を快諾したペンジユラム国王は、王宮を警護する近衛精鋭部隊をつけて王子をトリーエン王国に派遣した。

トリーエン王国は、これまでも、何かと紛争の絶えない国だ。北部ではいくつもの遊牧騎馬民族が覇を競っており、南部には好戦的なタプタイト帝国を控えている。攻め込まれることは珍しくない。自国の領土を守るだけの兵を持たないトリーエン王国は、そのたびにペンジユラムに援護を求めてきたのだ。

戦いは、あつけないほど簡単に片がついた。侵略軍は退散し、トリーエン王国の宮殿では戦勝を祝う豪華な宴が開かれた。そこで王子は、とある美しい姫に好意を寄せられたが、その姫にはさらに美しい侍女がいて・・・と、詳しい説明は省略するが色々とアホらしくもこみ入った問題が発生し、けっきょく王子は軍を先に帰国させ、お目付役のバルガスと共に自分だけ宮殿に滞在し続けることにしたのだ。

酒と歌と踊りの、夢のような毎日が続いた。数か月が過ぎ、さすがにトリーエン王国の人々の感謝に満ちた心の中にも「このひと、一体いつまで居座るつもりだろう?」という疑問が湧き始めてきた様子だったので、王子も重い腰を上げ、帰国することにしたのだ。たのしいバラ色の思い出の数々と、ちょっとした傷心を抱きながら。

そして、王国の領内にまもなく入ろうという所で、魔物の襲撃を受けたのだ。

「それにしても妙な話ですな。このような所にドラゴンがいようとは・・・」

バルガスがつぶやくと、王子は真剣に考えているのかいないのか分からない口調で、

「ナツキ帝国あたりでは、ドラゴンを飼い慣らして国境の警備にあてていると聞く。奴らのやり方もまんざらの外れじゃないってわけだな。我々でなきゃ、やられてたぜ。そうだる爺？」

しかし、ここはナツキ帝国ではございません。

バルガスの言葉を王子はもはやまったく聞いておらず、「もうすぐ都に帰れる。サーシャちゃんやミランダちゃんやベルちゃんと久しぶりに会えるんだ。わーい楽しみ楽しみ」と鼻歌をうたい始めており、なぜこのような場所に獰猛な魔物がいたのかという疑問は、どこかへ行ってしまったようだった。バルガスは再度溜め息をついた。

まあ、いい。王宮に戻れば、この変事に関するなんらかの情報が得られるかも知れない。憂慮するのはその後でよい。

王都ペリリューンは国境から馬で十日間ぐらいの距離にあるが、王子と家老バルガスが都に帰り着くまでには十五日の時間を必要とした。道中ふだんは出現したこともないような多数の魔物と遭遇し、それを退治するのに時間をとられたからだ。なにか異常事態が起こっているのは間違いないようであった。

小高い丘の上に建つ壮麗なペリリューン城と、その周囲に広がる城下町のどかな光景が見えてきたとき、王子もバルガスもほっとしたものだ。

しかし。

「お、おかしい！」

町の広場の噴水前に腰を下ろした王子がつぶやいた。

向かい合って立つバルガスもうなずいた。

「どうなっているのをごさいますしょう？」

「どの女の子の家に行っても門前払いなんだ。あんなにわたしに首

つたけだつたクレアちゃんさえ、まるで化け物でも見るみたいな顔をして扉を閉めてしまっし。一体どうしたっていうんだろ。半年も放っておいたのが悪かったんだろつか？」

王子が真剣な表情で首をかしげるので、バルガスは思わず白髪をかきむしってしまった。

「そ、そんな事ではなくて殿下！ 城門が閉ざされていて中へ入れないことを不思議がってください！ 陛下の治世になって以来、日中に城門を閉ざすなどかつてなかったこと。これはとんでもない変事ですよ！」

バルガスが城に入ろうとすると、跳ね橋が上げられ門は堅く閉ざされていたのだ。警備に立つ衛兵は「誰も通さないよう命令されております」の一点張りで、跳ね橋を下ろすことを拒否した。代々王家に親しく仕える家柄で、国王陛下の信望も厚いこのバルガスさえ通さないとは何事だ、と老人は激怒したが、衛兵は何の反応も示さなかった。

そう言えば、今まで見掛けたことのない衛兵だった。これもおかしな話である。城に仕える人間でバルガスの知らぬ者などいないはずなのだ。

ペリリューンは喧騒と活気に満ちた古都だ。『水の大陸』西部を東西に走る大河セミスフィア川の河口近くに位置するこの町は、交易の一大中心地なのだ。外国商人の姿も多い。石畳の舗道を誰もが忙しげに闊歩している。町のいたる所を運河が縦横無尽に流れており、荷物をいっぱい積んだ小舟が往来している。

そのにぎわい、ざわめきは普段とまったく変わるところはない。平和そのものの町のたたずまいであった。

王子とバルガスがしばし茫然と入々の往来を眺めていると、フードで半ば顔を隠すようにした黒衣の人物が近づいてきた。

「おどろいた。こんな目立つ所で、平気で座り込んでおいでは……」

フードの陰から若い女性の顔がのぞいた。まっすぐみつめる黒目

がちの瞳が印象的な、勝気そうな娘だ。

「やあ、レイシエルじゃないか。ひさしぶりだなあ」

「レイシエル！ 城は・・・一体どうなっているのじゃ!？」

王子ののんびりした声と、老人の切迫した叫びが同時に響いた。レイシエルと呼ばれた娘は指を一本唇に当てて彼らを黙らせると、素早く辺りの様子をうかがった。

「もうすぐここへ衛兵が捜索にやって来ます。殿下が町にお戻りになったことを城に通報した者がいるのです。みつかる前に急いで姿を隠さなくては。・・・殿下、おじいさま、あたしについてきて下さい」

彼女は黒衣の裾をひるがえして足早に歩き始めた。広場から放射状に伸びる無数の路地のうちの一つに入って行く。王子とバルガスは彼女に従った。

「衛兵が捜索に来るってどういうこと？ わたしがあんまり長い間トリーエンで遊んでいたもので、父上がご立腹なのかな？」

雑踏を抜けてほとんど小走りと言ってもよい速さで歩きながら、王子は声をかけた。

フードに隠れてレイシエルの表情は見えなかった。

「国王陛下は・・・お亡くなりになりました。王妃様もです」

えっ、とさすがに息を呑んで王子は思わず歩みを止めた。すぐ後ろを歩いていたバルガスは止まり切れずに王子の背中にぶつかった。

レイシエルも足を止めて、真正面から王子をみつめた。悲しみと憂いを含んではいるが、非常に強い視線だった。

「そして、みんな、あなたが陛下と王妃様を殺したと信じているんです」

第1章 出奔(3)

レイシエル「シユピーゲルはバルガスの孫娘だった。幼い頃から祖父と共に城内で暮らし、今は侍女の待遇を与えられている。薬師としての才能を買われ、もっぱら典侍医の助手をつとめているため、一般の侍女とは違った行動の自由が認められている。侍女は許しが必要ならば城からの外出は認められないが、レイシエルは薬の材料を調達するなどの理由でかなり自由に城を出入りすることができるのだ。いきおい、ペリリユーンの町の構造にも詳しい。

彼女に導かれて、王子たちは運河に通じる階段を降りた。油でも流したようにのったりと波打つ水面をたくさん的小舟が連なって進んでいた。このあたりを往来する小舟のほとんどは十隻位ずつ鎖でつながって列をなして進む。先頭の小舟にだけ人が乗って舵をとる仕組みだ。だから最後尾の小舟にこっそり人が乗り込んだとしても、先頭にいる人間には気づかれずに済むことがある。

三人は、岸に近いあたりを航行していた小舟に乗り込んだ。荷物の上にかぶせられた覆いの布に隠れるようにして、危険な広場から遠ざかっていった。

声をひそめてレイシエルは状況を説明した。

ほぼ三か月前に、国王と王妃がアレグザンダー・ファルシオン第一王子に殺害されたとの発表がとつぜん行われたのだ。王子はナツキ帝国から送り込まれた女間諜に心を奪われ、そのかされるままに凶行に及んだあげく逃亡したと。そして、「たまたま城に滞在していた」クレセント王国のルパート第五王子　クレセント王国は王妃の実家であり、ルパート殿下は王妃の実の兄にあたるのだが　が、事態が沈静化するまで臨時の摂政をつとめることになった。

国民はこの突然の発表に衝撃を受けた。最初の驚きが収まると、露骨に不信を表明する者も少なくなかった。城からの発表があまり

に曖昧で、謎や矛盾が多いものだったからだ。アレグザンダー王子がそんな事をするはずがない、すべてはペンジユラム王家を乗っ取るうとするクレセント王国の陰謀ではないか、というのがもっぱらの風評であった。ここ何年も顔を出したことのなかったルパート殿下が、たまたまこんな時に限ってペリリューンを訪れていたというのも出来すぎている。

国王と王妃の葬儀が公開されずに、城内で内密に行われたことも不信に拍車をかけた。国家元首の葬儀が国葬として行われないなど前例のないことだ。城からの発表では、ご遺体がむごたらし過ぎて国民には見せられないからとのことだったが　　国王が亡くなつたというのはそもそも本当なのか・・・。

一時は暴動でも起こりかねないぐらいに王国全土の雰囲気が悪化したのだが、一月たち、二月たつにつれて、そんな険悪な空気もやわらいできた。摂政となつたルパート殿下の人柄によるところが大きい。学者として長年クレセント中央研究院で歴史の研究に従事してきたルパート殿下は温厚で誠実な紳士だった。摂政としての働きぶりも立派だった。クレセントの利便をはかるうとすることなど全くなく、ペンジユラム王国の国益に対して忠実な、穏当な政治を行つた。しかも彼は、自分が摂政をつとめるのは正当な王位継承者であるエデュアルド第二王子が国王の座につくまでの間にすぎない、とつねに公言していた。

アレグザンダー第一王子については、「あの人はどうしようもないアホだが悪者ではない」というのが国民の大半の思いだったのだが・・・時がたつにつれて、やはり王子が両親を殺害したというのは本当かも知れない、という思いに変わってきた。それが証拠に、この数か月というもの王子は完全に姿を消しているではないか？ トリーエン王国の後宮に入り浸って遊んでいるらしいという噂もないではないが、仮にも一国の皇太子が、そんなに長い間そんな理由で自国を留守にするはずがない。

「でも、もちろん、あたしは信じてましたわ。殿下はトリーエン王

国で女遊びをしておられるに違いないってね。だって殿下ってそういう人ですもの」

かわいい顔をしてレイシエルはずけりと言つてのけた。王子とは幼い頃から城内で遊び友達として一緒に育っており、いわば幼なじみの関係だ。それだけに全く遠慮がない。

これ、言葉を慎みなさい、とバルガスがあわててたしなめたが、王子は反論できずにうなだれた。さすがの彼も事態の深刻さに打ちのめされていた。

敬愛する両親の突然の死　そして彼は王位継承権を失ったばかりでなく、いまや罪人として追われる立場なのだ。

王子はふと顔を上げて尋ねた。

「エデュアルドは、どうしてる？」

「留学先のオブリーク公国に使いを出しましたが、行方不明だとのことです。エデュアルド様は何か月も姿を消したあげくに突然ひよつこりと戻ってくるということがよくあるので、しばらく待つていればまた帰ってくるだろう、というのがオブリークからの返事でした。ずいぶん、のんきな話ですわ」

「あいつは昔から放浪癖があつて、わたし以上の自由人だからね。つかまえるのは大変だよ」

そう言つてから、不意に王子は暗い表情になつて視線を落とした。「エデュアルドのやつ、何て言うだろう・・・父上と母上が亡くなられたと知つたら。そしてわたしが殺したと聞かされたら・・・」しばらく舟上に沈黙が流れた。バルガスは目に涙をためていた。彼らの乗つた小舟は町の出口にさしかかっていた。レイシエルの合図で、彼らは舟から岸に飛び移つた。

運河の岸辺に立つたまま、三人は遠ざかっていく小舟をなんとなく見送つた。

重苦しい空気を振り払うように、王子は突然につこりと笑つて、いつもの元気な、脳天気な声で言つた。

「わたしは信じないよ、父上と母上が亡くなられたなんて。この目

で確かめるまではね。『おのれの経験のみを信じよ』というのが我が王家の家訓なんだ。きつとエデュアルドだって同じ事を言うはずさ」

「そう、そうですとも。そんな恐ろしい事が起こり得るはずがありません」

バルガスは目をしばたかせながら何度もうなずいた。

レイシエルはとても冷静な顔で王子を見返し、「これからどうなさるつもりですか?」と言葉少なに尋ねた。

「城に乗り込んでルパート叔父と話をする。事件の真相を確かめなきゃあ」

「え・えーっ!! わざわざ捕らえられに行くようなものですわよ。すぐに処刑されてしまうかも。・・・少しでもお知恵のある人間なら、ここはいったん町を出て身を潜めるべきだと思いますけど?」

「わたしを誰だと思ってる、こつ見えたって王子だよ? 誰にもみづからず外から城へ入れる抜け道なら、ちや一んと心得てるさ。

あの城には秘密の通路がたくさんあってね。昔よくそこを通過してこつそり夜遊びにでかけたもんだよ。大丈夫、まかせとけ!」

王子はどんと胸を叩いた。レイシエルは茫然と王子をみつめていた。

そんな事をなさっていたんですか殿下、秘密の通路を通過して町へ夜遊びには・・・バルガスがぶつぶつ呟いていたが、誰も聞いていなかった。

第1章 出奔(4)

城の裏手にある、今は使われていない修道院の建物の井戸の中へロープ伝いに下りていく。井戸の底に降り立つと、すぐかたわらにちようど人ひとり通れるぐらいの大きさの穴が開いているのがわかった。三人はしばし無言でその穴を進んだ。本来なら真の闇に包まれるのであるが、バルガスが《光明》呪文で周囲を照らし出したため、ひどく古びた煉瓦作りの壁や踏み固められた地面がはつきりと見てとれる。

「驚いた。本当に便利な通路ですわね」

レイシエルがつぶやき、自分の声が意外と大きく反響したので、びくりと身を縮めた。

王子は笑いながらうなずいた。

「そうだろうか？ 書齋で城の設計図を見ていて、この通路のことを知ったときには、神様からのプレゼントじゃないかと思ったほどだよ」

細い通路は、ゆるやかに上ったり下ったりしながら、いつ果てるともなく続く。実際には大した距離ではないのかも知れないが、天井の低い狭苦しい通路には非常な圧迫感があった。やがて通路は煉瓦造りの壁でさえぎられ、行き止まりになっていた。

「さあ、いよいよ城内に入るぞ」

王子が囁き、壁を押しした。壁は回転式の扉になっており、中央を支点としてぐるりと回り、三人を中へ通した。

これまでの道中のおどろおどろしさから、中ではどんな光景が待ち構えているのかと息を殺していたバルガスとレイシエルだが

目の前にあるのは意外なほど普通の部屋だった。飾りつけのほとんどない質素な室内に、寝台が規則正しい間隔を置いて二十ほど並べられている。身のまわり品らしい包みや籐製の籠などがそれぞれ寝台の足元に置かれている。きちんと片づけられた室内には、人

の気配はない。

不意にレイシエルの頬が朱に染まった。

「こ……ここは、あたしたち侍女の寝所だわっ！ 殿下！ 今までこっさりあたしたちの部屋に出入りしてらっしゃったんですか！ いやらしい……！」

「う、誤解だよ！」

王子はあわてて否定した。

「そりゃあ何度かきみたちが寝ている間にここを通らせてもらったことはあるが……いやらしい事など何もしていないさ。本当だ。見てくれ、ここの壁が別の通路の入口になっていて、わたしはただ通り抜けただけなんだ……！」

彼が少し離れた別の壁を押すと、その壁が先ほどの壁と同じく回転して、薄暗い通路へと口を開いた。

三人は再び狭い通路を進んだ。今度の旅はさほど長くはなかった。まもなく煉瓦造りの壁が彼らの進路をさえぎり、それを押すと、別の部屋への入口が開いたのだ。

今度の部屋は、先ほどの侍女の寝所とは違って、明るく華やかだった。天井まで届く大きな窓が、かなり傾いた午後の陽光を迎え入れている。壁は刺繍の施された絹張り。家具も金をふんだんに使った優美なものばかりだ。本棚に並ぶ重厚な装丁の本をみると、ここが身分の高い人の書斎であることがわかる。

今度は、はっと息を呑んだのはバルガスの方だった。

「こ、こ、ここはっ……！ フレイジア公爵夫人のお部屋ではありませぬか！」

フレイジア公爵夫人とはグウェナヴァー王妃の古い友人である。王妃の話し相手としてクレセント王国から招待され、もう一年近くペリリューン城に滞在している。知性にあふれ、中年とはいえないまだ衰えぬ色香と美貌を誇る貴婦人だ。

よよよ、とバルガスは泣き崩れた。

「ああ、殿下、わしは殿下の教育係として陛下に顔向けできませぬ。

一国の皇太子が名誉ある貴婦人の部屋に夜這いとは……！ なんとるふしだら。毎夜毎夜この通路を通って殿下はフレイジア様の私室に忍び込んでおられたのですか。わしはもう陛下に申し訳なくて……！」

「いやらしい！ 殿下の女好きは承知してましたけど、まさかここまでとは……！」

バルガスとレイシエルがいつせいに責め立てる。

「待ってくれ！ わたしが悪いんじゃない！ 秘密の通路がたまたまこの部屋を通っているだけで、わたしは別に女性の部屋をのぞき回るつもりはなかったんだ！」

「殿下。見苦しい言い訳をして、これ以上ご自分の品位をおとしめるような真似はなさいますな。爺は本当に情けのうございます」

「だーかーらー、違うって言うてるじゃないか！ このわたしが夜這いなどする人間に見えるのかい？」

「……見えます」

小声で、でもきつぱりと、声を揃えるバルガスとレイシエル。王子はもうお手あげだ、という身振りをしてみせた。

「いいかい。女性つてのは、手練手管の限りを尽くして口説き落とすからこそ楽しいんだ。眠っていて反応のない相手にちよっかいをかけたつて、楽しくも何ともない。わたしはそんな不毛な事はしないよ。いついかなる時でも正々堂々と正面からいく。それがわたしの流儀だ。戦いであっても……女性にいやらしい事をする時であっても、だ。夜這いなどするはずがない。信じてくれよ」

バルガスは、胸を張って力説する王子を見上げた。いかなる時でも正々堂々と行く、と言い切ったその姿のたくましくも凜々しいこと。同性ながら見とれてしまうほどだ。この方は本質的にとても高潔な性質をお持ちの方なのだ。バルガスは自分に言い聞かせた。神聖なるペンジユラム王家の正統な血を引く方だけのことはある。ただ、方向性が少しずれているだけなのだ……。

実際、通路の造りは相当古いもの。途中の部屋が侍女の寝所やフ

レイジア公爵夫人の書齋に使われるようになるずっと前から存在しているものであることは明らかだ。王子が夜這いや覗きのために作らせた通路であるとは考えにくい。

三人はぎこちない沈黙のうちに、公爵夫人の書齋から伸びるもう一本の通路をたどって行つた。通路は途中で階段に変わっていた。その階段を登りきつたところに壁があり、それを押し開けると

大広間だった。

ペリリューン城で最も壮麗な空間。外国からの使者の謁見や宮廷晩餐会などに用いられる、天井の高い華やかな広間だ。

いつしか夕闇が迫り始め、窓の外にはまがまがしく紅い夕陽が垂れ下がっている。薄暗くなっているというのに、室内には明りの一つすら点されていない。それだけではない。長い間閉め切つて使われていない部屋にありがちな埃っぽい空気が室内に漂っている。非常に荒れ果てた雰囲気だった。

かつては毎週のように舞踏会が催され、光と音楽と人々の笑い声で満たされていた大広間なのだ。この荒廃ぶりは何としたことか。大広間の奥に国王陛下の執務室に通じる扉がある。扉は完全に閉まってはおらず、わずかな隙間から明りが漏れてきていた。執務室には人がいるようだ。摂政をつとめるルパート殿下と考えるのが正しいだろう。

「ここで待っていてくれ。どういう展開になるかわからないから・・
・きみたちは顔を見られない方がいいだろう」

王子はバルガスたちを大広間に残し、ひとり執務室の扉に近づいた。

思い切って扉を大きく押し開ける。こうこうと明るく照らされた執務室の中には、彼の叔父であるルパート殿下と、副官らしい青年の姿があつた。室内にはその二人だけだ。

親衛隊の制服に身を包んだ副官は、手前の長椅子に腰をおろしている。燃えるような赤い髪。そして、男にしておくのは惜しいほどの美貌が目を引き、華奢な青年だ。年のころは二十そこそこだろう

か。

ルパート殿下は、その副官の膝枕で耳掃除をしてもらっているところだった。

あまりの退廃的な光景に、王子は一瞬立ちすくんだ。

「・・・そのようなご趣味とは知りませんでした、叔父上」

脱力したような声でつぶやく。体を起こしたルパート殿下は、驚いた様子もひるんだ様子も見せず、にやり、と不敵に笑ってみせた。「アレグザンダーか。どうやって城内に入ったのかは知らんが、いきなり私の前に現れるとはいい度胸だ。あるいは、単に何も考えてないだけか。例によつて」

「アレグザンダー、ですと！」

激しい反応を起こしたのは副官の青年の方だった。かたわらに置いてあったサーベルを手に、ぱつと飛び上がる。

「まさか、この男が・・・国王夫妻を殺害した極悪人アレグザンダー第一王子！ 今度はルパート様の御命を狙いに現れたか、この裏切者め！」

第1章 出奔(5)

アレグザンダー王子は気のない顔で副官を眺めた。その狼狽した表情、剣を構える手つきや姿勢を吟味した後、相手にする価値なしと判断したらしい。なにごともしなかつたように叔父に向き直り、「今日はお話があつて来ました。こんなことを頼める立場でないのは判つていますが、お人払いを願いたい」

「・・・そちらから出向いて来てくれたとは。話が早い・・・」
ひとりごとのように呟いた後、ルパートは副官に向かつて、「下がつてよいぞ、カミラ。ここは私一人で十分だ」

「しかし、ルパート様・・・」

「よいと言つたらよいのだ。私の腕前を知らんわけではあるまい？」
ルパートの声には、有無を言わさぬ威厳があつた。不承不承、という感じでカミラと呼ばれた副官は書斎へ通じる別の扉へと姿を消した。

アレグザンダー王子は不審を感じていた。ルパートの異常なほどの落ち着きぶりが気にかかる。国王夫妻を殺害して逃亡中、ということになつている人物がいきなり現れたのだから、もっと驚きあわてるべきではないのか？ その意味で副官カミラの反応のほうが普通だろう。ルパートは、甥の不意の訪問を受けて戸惑う叔父、という以上の反応を見せていなかった。

それに、この堂々たる物腰、百戦錬磨の將軍のような肚のすわつた不敵な態度・・・。王子の知つているルパート叔父は、こんな人ではなかつた。物静かで線の細い学者タイプ。俗世間のことにはうといが、古代のロマンについては滔々と語り続ける夢想家。それがルパートだつたはずだ。

見慣れたはずの叔父の顔を前にして、王子はまったく見知らぬ人間と向かい合つているような違和感を覚えていた。

「話とは、いったい何だ？」

鞭でぴしりと打つような、ルパートの鋭い声が沈黙を裂いた。王子はルパートの目から視線をそらさずに、ゆっくりと話し始めた。「叔父上・・・わたしはこの数か月、トリーエン王国に滞在していました。帰国してみるとこの騒ぎです。父上と母上は殺され、しかもわたしはその下手人であると。あなたなら判つてくださるはずです。心から敬愛している父上と母上を、どうしてわたしが手にかけるはずがあるでしょう。教えて下さい。今この国ではいったい何が起こっているのですか？ 父上と母上は本当にお亡くなりになられたのですか？」

「ヘイズリーとグウェナヴァーは死んだ。それは確かだ。私はこの目で死体を見たのだから・・・我がいとしき妹グウェナヴァーの・・・」

ルパート殿下は夢見る口調で呟いた。

「あれは私がペリリューン城に到着して三日目だった。本を読んでいた私は、恐ろしい悲鳴を耳にして居室から飛び出したのだ。悲鳴はヘイズリーの寝室から聞こえてきた。部屋に入ってみると、辺りは血、血、血・・・。飛び散った血で赤一色だ。床に倒れたヘイズリーとグウェナヴァーは・・・いや、詳しい事は言うまい。むごたらしい、実にむごたらしいことだよ。部屋の中央に、剣を持った手を二の腕まで血潮に染めたアレグザンダーが立っていた。彼は呟いた、『これは美しいシュシャナへの捧げ物だ・・・シュシャナよ、きみの言いつけに従ったわたしを愛してくれるかい？』・・・」

「嘘だ！ それは事実ではない、そんなこと叔父上はご承知なんでしょう！？ わたしが下手人だという噂を広めたのは、やはり叔父上だったのですね。しかし何故、何故、何故！？ まさか本当にペンジラム王国に野心を抱いて・・・！？」

「アレグザンダーはその場から逃走した。後で調べたところによると、シュシャナという女は城下町の宿屋に滞在していた旅行者で、この騒ぎの直後に姿を消した。じつに美しく妖艶な、赤毛の女だったそうだ・・・おまえが骨抜きにされたのも無理はない。そうだろ

う、アレグザンダー？」

不意にルパートの瞳に焦点が戻った。王子を見据えて、邪悪な笑顔を浮かべた。

「古くから、こういう論争がある　誰もいない山奥で一本の木が倒れた。聞く者が誰ひとりいなかったとしたら、木が倒れる『音』は存在したと言えるのか？　・・・真実もそれと同じようなものだよ。事件を目撃した者がひとりしかなく、しかもその者が沈黙を守るなら・・・その事件は存在したと言えるのか？」

「それはただの詭弁だ。わたしは両親を殺害してなどいない。あなたが何を言ってもその事実は変わらない・・・！」

「この件に関しては、私の言葉こそが真実となる。『本当はどうだったか』という事になど、何の意味があるだろう、知っているのは私だけなのに？　いや、もちろん、おまえの口を封じるということが条件となるがな・・・」

ルパートの言葉と共に、ひやりとするような殺意が空気を満たした。

アレグザンダー王子は憤怒に燃える瞳で叔父を睨み据えた。

「あなたが父上と母上を手にかけた。そう考えていいわけですね、叔父上」

「さあな・・・本当のところを言うと、わたしは彼らの死をきちんと確認したわけではないのだよ。なにしろ死体の首から上は両方ともなくなっていたものでな、どちらが誰の死体なのやら判りはしない・・・」

ぞつとするような笑い声。

我慢し切れず、アレグザンダー王子は剣を抜いてルパートに斬りかかった。

王子の渾身の突きを、ルパートは抜いた剣でしっかりと受け止めた。

激しい斬り合いとなった。

アレグザンダー王子は国内屈指の剣の使い手として名高い。彼と

互角にやり合える人間はそれほど多くない。一方、ルパート殿下はふだん剣を帯びる習慣を持たない学者であって、剣士ではない。そんな二人の勝負は初めから見えてはいるはず、だったのだが……。

両者互いに一步も退かない、互角の戦いが優に五分以上は続いた。ルパート殿下は稲妻の速さで剣をふるい、その技の冴えに王子は内心舌を巻いた。これは只者ではない　　熟練の剣士そのものだ。

ふたりの剣がぶつかり、火花を散らす。

不意に扉が開いて、赤毛の副官が駆け込んできた。

「助太刀いたします、ルパート様！」

「余計な事はするな。下がっておれと言っただらうが！」

ルパートが怒号を発する。

戦いは一対二になった。やや不利になったと判断した王子が、背後をとられないよう壁の方へ下がった。じりじりつと距離を詰めるルパートたち。

赤毛の副官が半ば目を閉じ、口の中で呪文のようなものを懸命に詠唱しているのを王子は見てとった。

不意に、爆発かと思わせる勢いで、壁が砕かれた。

執務室と書斎をつなぐ大きな穴が開いた。

その穴の向こうに立っているのは漆黒の怪物……！　形は豹に似ているが豹よりはるかに巨大で、しかも全身鱗に覆われている。長い牙が二本突き出ている口元から、低い唸り声が漏れた。小さな赤い瞳が邪悪に光っている。

「行けつ、ネポレットよ。あの者のはらわたを食いちぎってまいれ！」

怪物のかたわらに立った副官が男にしては細い声で叫び、アレグザンダーを指さした。

「そうか、あいつ召喚士か……！」

アレグザンダー王子は怪物を迎撃する体制を整えながら呟いた。ナツキ帝国あたりには、異世界の魔物を自在に呼び寄せて操る能力の持ち主がいると聞いたことがある。むしろ実際にお目にかかるの

はこれが初めてだが。

凄腕の剣士と巨大な怪物。ひとりでもやり合うには、いささか荷の重い相手だ。

そのとき。

「『雷光』！」

いきなり弾けた強烈な光がその場にいた者全員の目をくらませる。電撃に打たれた怪物ネポレットが苦悶の叫びをあげ、身をよじらせた。

大広間へ通じる扉が開き、杖を構えたバルガスが立っていた。かたわらにはレイシエルの姿もある。

「殿下、お手伝いいたしますぞ！ この怪物は、わしにお任せください！」

つかつかと執務室に歩み入ってきたバルガスは、老練な魔道士らしく、非常に短い時間で呪文の詠唱を終えると、

「『灼熱』！」

杖をぐつと突き出す。怪物は床に転がりのたうち回った。長い尾を苦しげに振っている。いきなり体内で高熱の塊が湧き上がり、内臓を焼いたのだ・・・その痛みは言葉に尽くせない。いかに怪力を誇る巨大な怪物といえども、ひとたまりもなかった。

「く・・・くつそーっ！」

副官カミラは罵声を発し、バルガスたちの横をすり抜けるようにして扉から執務室を飛び出していった。ふたりは制止しようとしたが、青年が剣を振り回しているので止めようがなかった。

「『氷剣』！」

バルガスの魔法で空中に出現した巨大なつららが、落下して怪物の脳天を貫き絶命させた。怪物の断末魔の咆哮がしばらく宙に漂っていた・・・。

「さすがは、おじいさま」

レイシエルがにっこりした。今度はアレグザンダー王子を援護してルパート殿下と戦わなくては。そう考えて身構えた彼らの背後か

5
.
.
.

第1章 出奔(6)

大群衆が大広間になだれ込んできた。

兵士ではない。料理人、洗濯女、掃除婦、庭師、小間使　　みんな古くから城に仕えている者ばかりだ。それが、手に手に棍棒、包丁、鎌など武器になりそうな物を持って襲いかかってくる。

彼らの目は不思議に焦点を失っている。あきらかに、何者かに操られているのだ。

副官カミラのしわざに違いなかった。

武器を手にした人々に取り囲まれて、バルガスたちは立ち往生した。振り下ろされる棍棒や鎌を懸命にかわす。

「くっ・・・！」 『雷光』！」

「だめだ、爺！」

呪文の詠唱にかかったバルガスに、アレグザンダー王子は制止の声を放った。

「この者たちは操られているだけだ。無垢の国民を傷つけるわけにはいかない」

「し、しかし殿下・・・！ このままではやられてしまいます」

「ほお。お優しいことだな、アレグザンダー。国民を傷つけるのが嫌だとは。・・・いつまでそんな綺麗ごとを並べていられるかな？」

ルパートの冷笑が響く。いつそう鋭さを増した叔父の剣をアレグザンダー王子は必死で受け流した。

数分後。彼らは大広間から外へ張り出したバルコニーに追いつめられていた。剣を構えたアレグザンダー王子がじりっ、じりっその後退する。その背後にバルガスとレイシエルが隠れるように身を寄せしている。

操られた群衆を背後に従えたルパート殿下が、余裕の表情で、そんな彼らを見回した。

「観念することだな。もはや逃げ場はない。・・・わざわざ殺され

るために乗り込んできた、おのれの愚かさを悔やむがいい」

「く……。かくなる上は……。」

アレグザンダー王子が歯ぎしりしながら呟いた。

「かくなる上は……。何でございます？」

バルガスが期待に満ちて訊き返した。ついに出るのか『裂帛斬』。

それとも伝説の最強剣技『驚天斬』か？

「……。三十六計、逃げるにしかず、だ」

「はあっ？」

バルガスのがっかりしたような顔など気にもとめず、アレグザンダー王子は「食らえ、『煙幕』！」と叫ぶと、懐からつかみ出した灰色の小球を床に叩きつけた。

煙幕、と言うからには、白煙が猛然と立ちのぼって敵の視界を奪うはずだ。

王子もそのつもりで調査したのだった。

ところが実際に立ちのぼってきたのは、ふんわりとした薄いピンクの煙。これではまったく煙幕としての役目を果たしていない。ピンクの煙は広がり、全員を包んだ。

「またしても、おやりになりましたわね、殿下！」

レイシエルが金切声をあげた。しかしその声に含まれているのは怒りではない。むしろ大爆笑寸前のヒステリックさ、という感じだ。「こんなの、全然『煙幕』じゃないじゃありませんか。もう、こんな簡単な薬の調査にさえ失敗しちゃうんですか？ 殿下はまったく薬師としてはへボ、へボ、へボですわよ！ いいえ、へボ以下だわ！ この役立たずの、ぶきつちよの、へっばこ薬師！ あーははははは、言いたいこと言ったら、すごくすっきりしちゃった」

「レイシエル！」

バルガスの鋭い声が飛んだ。しかし……。なぜかその顔は笑っている。

「よくぞ言ってくれた。わしがかねがね言いたくてたまらなかった事を。でかした！ さすがは、わしの孫じゃ！」

「ひどいなあ、二人とも」

呆然としてアレグザンダー王子はバルガスとレイシエルの顔を見比べた。だが我ながら不思議なことに、面罵されても少しも怒りが湧いてこない。それどころか二人の台詞がたまらなくおかしく聞こえる。何もかもが晴れやかで楽しく、大声で爆笑したいような気分だ。

ルパート殿下はもう、目の端に涙がにじむくらい笑い転がっていた。剣はとつくに下ろしてしまっている。

「その娘、うまいことを言うではないか。へボ。そう、へボ。おまえを形容するのにこれ以上ふさわしい言葉はないな、アレグザンダー。わーははははは、こりゃあ愉快だ」

「何が愉快なんですか、叔父上まで。まったく。ははははは……」
アレグザンダー王子も笑いの渦に飲み込まれた。ただならぬ爆笑気分に含まれているのは彼らだけではないらしい。大広間を埋め尽くした群衆も、みんな楽しそうに笑い転がっていた。

王子が調査した薬が、予想もしなかった効果をもたらしたのだ。煙幕を作ろうとしてどこをどう間違えばこのような代物ができるのか、それは誰にも判らない。

何か、しなければならぬ事があつたはずだ。しかも緊急に。

王子の浮き立った頭の隅で小さな声がそう囁いていた。ひたすら面白くて愉快で、今いちばんやりたい事といえば目の前のルパート叔父やその他の人々と肩組み合つて大声で歌うことなのだがその小さな声が、王子の陶酔を妨げていた。いったい何だっただろう。気にかかる。おかげで楽しく騒げやしない。

そうだ。思い出した。

王子はよろめきながら、バルコニーの端まで歩いて行った。冷たい夜空に向かつて腹の底から叫んだ。

「小鳥さーん！ 小鳥さーん！！」

しばらくは何事も起こらなかった。大広間ではすでにあちこちで

合唱が始まっていた。ルパート殿下もその人波に飲み込まれ、一緒になって歌をがなり立てている。誰もがこの上なく上機嫌だった。それはかなり異様な光景だった。

巨大な黒い影が、すごい速さでさつと夜空を横切った。

ばさばさばさつ。風を巻き上げて、鳥、と見える大きなものがバルコニーの縁に降り立った。それはアルフェルシア。王家を守護する高貴なる猛禽だ。『小鳥さん』などとはとんでもない話で、翼を広げると優に大広間の幅ぐらいいはある。

アルフェルシアは小首をかしげ、知的な瞳で人間たちを見下ろした。

「みんな乗れ！ 逃げるぞ！」

王子は仲間たちに声をかけたが　　バルガスもレイシエルも笑っているだけで動こうとしない。せき立てて、突ついて、ようやく二人をアルフェルシアの背に乗せるのに成功した王子は、よく通る声で命じた。

「よし、行くぞ、小鳥さん！」

アルフェルシアは三人の人間の重みを楽々と持ちこたえた。巨大な翼をばさつと開いて、夜空へ飛び立つ。狂乱の大広間が眼下に見る見る小さくなっていった。

冷たい夜風のおかげで、ようやく彼らは薬の影響から逃れて正気を取り戻した。

「おそろしい・・・」

レイシエルが呆然と呟いた。アレグザンダー王子はうなずいた。

「あれは叔父上じゃない。たぶん何者かに操られているんだろう・・・わたしたちを襲った城の者と同じように。あのカミラって男、かなりの曲者だな。おそらくは、ナツキ帝国の放った魔道士」

だがレイシエルは首を横に振り、ものすごくきつぱりと言い返した。

「違います。おそろしいのは、殿下の薬です。どうなるかと思いましたがよ、本当に」

『小鳥さん』はアレグザンダー王子が雛（？）の頃から育てたペットである。アルフェルシアは王家の守り神として尊重されている誇り高き猛禽で、高い知能と戦闘能力を持ち、人間の命令などやすやすとは聞かないのが普通だ。しかし動物を手なずける名人である王子は見事アルフェルシアをペットにすることに成功したのだ。

聖なる守り神をペットなどにしたら、まちがいに周囲から反対される。だから『小鳥さん』を飼うのは周囲に内緒で行われたが、両親やお付きの者たちに見つからず、こっそりアルフェルシアを育てるのはさほど難しいことではなかった。この鳥は、自分の体の大きさを自在に変化させる能力を備えていたのである。王子は『小鳥さん』をふだんは普通の小鳥のようにして飼い、時おり誰もいない山奥へ連れて行っては、本来の巨大な姿に戻して自由に飛び回らせていた。

人の足なら何日もかかる距離を、アルフェルシアはあっという間に飛び去った。彼らは結局、ペンジュラム王国の南端にほど近い森の中に着陸した。アルフェルシアが慣れぬ国外の空を飛ぶことをいやがったためである。森で野営して夜が明けのを待ち、明朝徒歩で国境越えをすることになった。

事態がこうなってしまうのは、もはや王国内にとどまることはできない。そのことには誰も異論はなかった。

第1章 出奔(7)

早朝。

冷たく冴えた空気の中で、軽やかに小鳥たちが鳴いている。木々の間を縫って朝日が差し込んできている。実に平和で静かな光景だった。色々な事があつた激動の昨日が嘘のようだ。

実は何もかも、ただの悪い夢だったのではないか。ペリリユーンに戻れば、みんな何事もなかつたように出迎えてくれるのではないか。

そんな錯覚にすら陥ってしまうような、森の静けさであつた。

小川の冷たい水で髪を洗つたアレグザンダー王子は、水滴をしたたらせながら、そのまましばし川の流れをみつめていた。

輝くような黄金色だつた彼の髪は、漆黒に変わっている。衣料を染めるのによく使われる植物が森の中に自生しているので、それを集めて精製したのだ。

この先、身分を隠して旅をしていくために、人目をひく鮮やかな金髪を黒く染めてしまうことにしたのだつた。

変化はそれだけではない　純白、真紅、金。そんな明るい色彩の衣服を好んで身にまとう彼であつたが、今の服装は黒の着衣に黒の外套。見違えるように、地味な装いだ。

「どうです？　髪はうまく染まりましたか」

その声をかけようと歩み寄つてきたレイシエルは、王子のただならぬ雰囲気に気づいて、少し離れた所で足を止めた。

アレグザンダー王子は長い間、微動だにせず水面を見下ろしていた。

「・・・お許してください、父上、母上。わたしが不甲斐ないばかりに、ペンジュラム王国を他国に奪われてしまいました・・・」
その口が開いて、低い声が漏れた。

彼が見ているのは川の流れではない。ありし日の平和な王宮。峻

巖な中にも慈愛に満ちた物腰の名君ヘイズリー七世。そしていつも微笑みを絶やさない美しいグウェナヴァー王妃だ。誰からも慕われ、敬愛されていた国王夫妻。

「わたしは今ここに誓います・・・かならず王国を取り戻し、父上と母上がどこにおられようと、救い出して王宮に連れ戻してさしあげると。それが果たされる日まで、わたしは黒以外の色を身につけぬと誓います。この黒はわたしの心の色です。憤怒と憎悪と復讐の決意・・・」

王子の瞳に、絶望すれすれの強い光がきらめいた。

「わたしは信じません、父上と母上がお亡くなりになったなどという戯言は。きつとどこかで生きておられるはずです。そうですね・・・？」

確かに状況は絶望的だ。王国はあきらかに不穏な意志を抱いた者たちによって支配されており、国民はそれに対して特に疑いも抱いていない。国王夫妻は行方不明で生死さえ知れぬ。そして彼自身は殺人者の汚名を着せられ、捕らえられれば処刑される身。敵に戦いを挑もうにもなんの兵力も持たないのだ。

ふと、レイシエルの気配を察知して王子は振り返った。

レイシエルはうるんだような瞳で、じつと彼を見返していた。

深刻な表情は一瞬で消え去り、いつもの脳天気な顔で王子はにっこり微笑んだ。

「いやあ、わたしって、意外と黒も似合うんだなあ。あんまりいい男なので、つい自分に見とれてしまったよ。どんな装いをしてもこんなにカッコいいなんて・・・ときどき自分でもこわくなるくらいだ」

「ええ・・・よくお似合いだね。きつとどこへ行っても女の子にモテモテですよ」

レイシエルは答えたが、どことなく、心ここにあらずといった様子だった。王子は笑い声をあげた。

「そうかい？ きみにそう言ってもらえると、うれしいな」

ふたりは肩を並べて、小石や張り出した木の根でこつこつした小径を歩き始めた。ちよつと離れた空地で、バルガスと『小鳥さん』が待っている。

元気な足どりで歩きながら、王子が言った。

「これからは『殿下』という呼び方はやめてくれ。堅苦しいしゃべり方もなしだ。我々はただの平民として旅をしなくてはならない・・・身分を感じさせるようなことは一切やめにしよう」

「わかりましたわ」

「いや、わかっただけじゃないよレイシエル。その堅苦しい口調をやめてくれって言ってるのに」

レイシエルは足を止めた。大きな黒い瞳をまっすぐ上げて、王子をみつめた。

彼もつられて立ち止まった。

「・・・じゃあ、あなたのこと、また“ファル”って呼んでもいいのね。子供の頃みたいに」

レイシエルの声には、なんとも言えないしつとりした不思議な響きがこめられていて　王子は自分でも理由はわからずに照れた。

「ファルか。懐かしいな」

「殿下ーっ。どこにおられるのですかーっ？」

バルガスの間のびした声が、ふたりを包む親密な空気をぶち破った。

「食事の支度ができましたぞ。おいで下され」

空地へ戻ってみると、焚火の上で何羽もの野鳥が焼かれ、食欲をそそる匂いをたてている。食用の野草が山ほど積み上げられている。ぱちぱちぱち・・・と明るい音をたててはぜる焚火の前でバルガスが腰を下ろしていた。

質素な食事だ。しかし王子は不服の表情ひとつ見せなかった。森の中で食材を調達しなければならぬのは幾度かの遠征で慣れているし、追われる身となった今、衣食住について贅沢を言っていないのは承知していたからだ。

「……これから、どう致しましょうか、殿下」

食事が終わりに近づいた頃、バルガスが静かだが重みのある口調で尋ねた。

アレグザンダー王子は二人を見返し、ゆっくりと答えた。

「まずエデュアルドを見つけ出す。ルパート叔父の狙いが何かはわからないが……このまま放っておいては、エデュアルドの身に危険が及ばないとも限らないからな。あいつと合流できたら、母上のご実家であるクレセント王国へ赴いて、お祖父様の力を貸してもらおうと思う。ルパート叔父がなぜあのように人変わりされたのか、いきさつが知れるかも知れない」

しばらくの間、沈黙が辺りを支配した。

「ひよつとすると……敵の手はすでにクレセントにまで及んでいくかも知れませんか」

「つい、いつもの堅苦しい口調に戻ってレイシエルが言った。王子はひよいつと肩をすくめた。

「な」に。その時は、そのとき。悪い事ばかり予想してたって仕方ないだろう？ 今のところ、ほかに行くべき場所も思いつかない。とりあえずクレセントを目的地にしよう」

相変わらず、物事をきちんと考えているのか考えていないのか判らない、軽い言い方だった。

とくに異論をはさむでもなく、バルガスは深くうなずいた。そして彼方を見やった。はるか彼方、クレセント王国の存するであろう方角を。

「長い……長い旅になりそうですね、殿下」

クレセント王国は『水の大陸』を南北に横切るヘプタゴン山脈の彼方にある。ヘプタゴン山脈は険しいばかりでなく、人の方向感覚を狂わせる樹海に覆われており、通常の方法では越えることはできない。大きく南部へ迂回して峠越えをするしかないのだ。

「そうですね……長い旅になるだろうな」

第2章 西の風使い(1)

ペンジュラム王国は、東のクレセント王国と並び、「水の大陸」では最も歴史の古い国である。

条件のよい港をいくつか擁しており、クレセント王国との間で活発な貿易を行っている。それはすなわち、巨大な山脈によって隔てられた大陸の東西の、物資の交流の中継点となるということであった。運河や街道を通じて近隣諸国からペンジュラムに集まった商品は、船によってクレセントへ、そして「水の大陸」東部の国々へと流れていく。逆に大陸東部からの珍しい品々が、海路ペンジュラムへと運ばれて来る。そういった品々に、大陸西部では非常に高い値がついた。

ペンジュラムは貿易で栄える国であった。歴代の国王が規制の少ない、商業を奨励する政策を敷いてきたため、その繁栄はいっそう揺るぎないものとなった。特に現国王のヘイズリー七世の統治下で国はますます栄え、多くの外国の商人が往来し、都ペリリューンには国際都市としての自由な空気が横溢していた。民は平和で豊かな暮らしを享受し、ヘイズリー七世を「賢王」と称え敬愛した。ペンジュラム王国はいわば国家としての絶頂期を迎えていたのである。そう。ほんの数ヶ月前までは。

ペンジュラム王国の南には、大小あわせて数十の国がひしめいている。国境線は複雑で絶えず変化しており、いたる所で領土などをめぐって紛争が行われている。これまで大きな戦争にならずに済んだのは、大国ペンジュラムが大陸西部での秩序を維持するために目を光らせてきたためである。

街道は整備されてはいるが、所によっては治安が悪く、追い剥ぎの出没も決して珍しくはない。

一国の皇太子がろくに伴も連れずにお忍びで旅をしようとするれば、

さまざまな困難が予想される大陸西部の状況であった。

アレグザンダー王子一行は徒歩でオブリーク公国の領内に入った。オブリーク公国はソルバツール大公の収める緑豊かな小国である。ペンジュラム王国の南に位置し、ペンジュラムとは長年友好関係を保っている。都ヘカターは芸術の中心地として知られ、自らも力量ある劇場歌手であるソルバツール大公の庇護を得て、多くの劇場や美術館が隆盛を誇っている。歌を愛し、スペルシンガーを志すエデュアルド王子がオブリークを留学先として選んだのも当然の話だ。

タングル湖畔に広がる森の中を、三人は南へ向かってひた進んだ。「この森を抜ければ、たしか小さな村があったと記憶しております。そこで馬を手に入れねばなりませんまい。徒歩ではヘカターまで遠すぎますからな」

バルガスがそう言い出したのは、森の中を流れる小川のほとりで休憩している時のことだった。

アレグザンダー王子　これからは一行内での呼び方に従ってファルと呼ぶことにするが　　は陽気にうなずいた。

「そうだな、それがいい。あんまり歩いてばかりだと、わたしのスマートフォンな長い脚がすり減ってしまうかも知れない・・・そんなことにもなったら大変だ」

バルガスは溜め息をついた。自分たちの置かれている窮状をこの方は本当に理解しておられるのか、という深刻な疑問が、何十回目ではあるが、またしても頭をもたげてきたからだ。

「ときにファル様。ヘカターへ赴いた後、どのようにしてエデュアルド様を探すおつもりですか。エデュアルド様は行方知れずになつておられるのでしょうか？」

「んー？　あんまり考えてなかったが・・・宮殿へ行ってソルバツール様か、エデュアルドの世話をしていた誰かに、あいつの向かいそうな場所に心当たりがないかどうか訊けばいいんじゃないのか？」

「それはあまりお勧めできません」

きつぱりと、バルガスは言い切った。

ファルは驚いて家老の顔を見返した。

「どうして駄目なんだ」

「ペンジュラムでの変事に関する情報は、きつとこちらにも十分伝わっております。ソルバツール大公は亡きヘイズリー陛下と親友と呼んでもよい仲でございました。またお二人は遠縁の親戚にもあたる間柄。

大公がファル様に対してどのような感情を抱いているかは、想像するに難くありません。大公はファル様が陛下を手にかけてと信じておられるに違いありませんゆえ……」

ファルはごくりと唾を飲み込んだ。

「ソルバツール様が、わたしを憎んでいると？ そんな……！」

「生憎ですが、それが現実でございます。周囲は敵ばかりと考えていたただかなくては」

「子供の頃には、あんなに可愛がってもらったのに……！」

「なんとかして宮殿の者たちの不審を招かずに、エデュアルド様の行方を聞き出す方策があればよいのですがのう……」

ファルはうなだれた。自分の両足の間をのぞき込むようにして、深い思索にふけっているように見えた。

柄にもなく深刻に考え込んでいる王子の姿を見て、バルガスは心が痛んだ。これまで親しくしていた人たちから迫害される身になった気持は如何なものか。慰めの言葉をかけようとした時、ファルが勢いよく顔を上げた。その表情は明るく、苦悩のかけらすらなかった。

「うーん……考え過ぎて、頭が痛くなってきたよ。もうやめたやめた！ 考えるのは爺に任せた。わたしは昼飯でも調達してくるよ。体を動かす方がわたしには合ってるみたいだ」

そして、木を削って作った手製の弓矢を持って立ち上がり、元気いっばいに森の奥へと消えて行った。

残されたバルガスは……眉間に皺を寄せて、豊かな白髪をがし

がしとかきむしった。

王子の心中を、どうしても思いはかることができなかったからだ。ファルは獣の姿を求めて森を進んで行った。彼は剣だけでなく弓矢の名手でもある。三人の腹を満たすのに必要なだけの獲物をいつでも仕留める自信はある。

深い森の中は薄暗く、涼しげだ。ごつごつした木々の根と落ち葉に覆われた地面に、木漏れ日が複雑な模様を描いている。辺りは静かだ。虫の声と自分の足音、そして水の流れる音しか聞こえない。どれぐらい進んだだろうか。

彼らの休憩していた小川のせせらぎが遠くなり、水音が完全に聞こえなくなってしまうってから数刻。

不意に、ファルの足が、やわらかい落ち葉を踏み抜いた。

落ち葉の下に、彼の体重を支えるべき地面が存在しない。だしぬけに現れた空洞。

ファルは落ち葉に隠されていた穴の中に転落した。

落下距離はそれほど長くはなかった。しかし、完全に不意を衝かれたファルはバランスを崩し、背中から落ちた。穴の底でたたかに背骨を打ちつけ、息が詰まった。しばらく立ち上がれない。

「!?」

彼の身長の上から、二倍以上の深さがある穴だ。とうてい自然にできたものとは思われない。つまり、落とし穴ということになる。こんな森の中で誰が？

答えはすぐに明らかになった。

「おおつ、かかつとるかかつとる、獲物が、今日は大漁やな。」

オブリークは間抜けが多いから好きや」

響きわたる、朗々たる男の声。

まもなく穴の上から、ひとりの青年がひよいと顔をのぞかせた。

年頃はファルとさほど変わらない。まっすぐ伸びた銀髪と、

不敵きわまりないまなざし、そして左頬に走る大きな傷痕が印象的な青年である。青年はファルを見下ろして笑った。

「悪いな、兄ちゃん。この穴から出してほしかったら、金目の物を全部渡してもらおか。全部やで。金より命の方が大事やる？」
「って、げーっ！！ おまえ、ペンジユラムのアレグザンダーやないか！！ なんや、その、変な色の髪の毛は！？」

「ヴィンクマークか」

ファルは脱力してつぶやいた。

相手は顔見知りだった。ヴィンクマーク「ゼファー・ワークバー
ル・タブティス。トリーエン王国の南部に領土を持つタブタイト帝
国の第四王子だ。

「こんな所で、追い剥ぎの真似事か？」

「真似事と違う。ほんまもんの追い剥ぎや。」

知り合いやから

って容赦はせんで。金目の物をさっさと出せや、アレグザンダー。
見たところ今日は剣を持ってへんようやし・・・『裂帛斬』を出せ
ないおまえなんか怖くない・・・！」

目にもとまらぬ熟練の早業で、ファルは弓に矢をつがえ、頭上の
ヴィンクマークに向かって放った。

ヴィンクマークは避けようとする動きすら見せなかった。にやに
や笑い続けている、その顔のすぐ前で、小さな竜巻のような空気の
渦が発生する。ファルの放った矢はその渦に巻き込まれ、激しく回
転しながら垂直に落ちた。

ヴィンクマークは剣士であると同時に、空気の流れを生み出し自
在に操る能力も持っている。『風使い』と異名をとる所以だ。^{ゆえん}

ファルは舌打ちした。このままでは勝ち目が薄い。風使いに対し
て弓矢は有効な武器とは言えない。しかも地の利は敵にある。こん
な穴の底にいたのでは相手の攻撃に対して完全に無防備ではないか。
ファルは気合を溜めて、跳躍した。

すばらしい跳躍力で一気に穴を抜け出す。

地面に降り立った瞬間、ヴィンクマークの攻撃が襲ってきた。『
風の刃』。相手の身体近くに真空を発生させて皮膚を切り裂く必殺
技だ。ファルはのけぞったがかわしきれず、頬に傷口が開いた。ほ

とばしる鮮血　　ヴィンクマークは首筋を狙ってきている……。だが、彼の肩越しにちらりと見えた光景が、ファルに希望を与えた。はるか遠くからバルガスとレイシエルが駆けてくる……。！

「……『雷光』！！」

バルガスが走りながら杖をぐいと前へ突き出す。轟音と共に弾ける雷鳴。間一髪、ヴィンクマークは横へ飛びのいて雷の直撃をかわした。そしてそのまま自分の掘った落とし穴に落下した。

「……！」

ファルたち三人は用心しながら穴の縁に近づき、見下ろした。ヴィンクマークは穴の底でへたり込んでいた。

「あかん……。俺の負けや。堪忍してくれ。さっきここを通った奴から巻き上げた金、おまえらにやるから」

タプタイト帝国は、いわゆるならず者国家というやつだ。『水の大陸』西部に絶えず災いの種をまき散らし、緊張の原因となっている。

さほど資源もない国なのに、軍に資金をつぎ込み、非常に強力な兵を擁している。全面戦争に持ち込む度胸はないが、周辺諸国の隙をみては攻めてきて、国境近くの町や村を襲って物資を略奪する。形勢有利とみるや占領して自国の領土にしようとする。また戦闘の際、相手方の貴族高官を捕虜にするのに成功すると、その解放と引き換えに身代金を請求してくる。とても独立国とは思えぬこすつかりやりの口なので、『盗賊軍団』と陰口を叩かれているほどだ。

そのタプタイト帝国のヴィンクマーク第四王子もただ者ではない。国を離れて世界中を放浪しており、金になりそうな事になら、何でも首を突っ込んで回っているのだ。今回のような追い剥ぎまがいの事も平気でやってのける。給金さえ十分なら、どこの国にでも傭兵として雇われる。王子としての矜持などまるで持ち合わせないかのようだ。

だからファルはこれまで何度もヴィンクマークと剣を交えたことがあるし、逆に味方として同じ軍で戦ったことも何回かある。ある意味、友人以上に縁の深い間柄だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8602h/>

黒の皇太子・改

2010年10月14日13時41分発行